

暮らしとかわるすべての水循環の経路を、私たちのセンターでは「里川」と呼んでいます。

いろいろな里川を発見しその価値を身近に感じたい！ ということで、2011年度からスタートした「里川文化塾」。「拡がる雨水利用」(10月18日)と「木版画の魅力と和紙を知ろう」(11月8日)のご報告です。

里川文化塾

詳細はHPで公開しています。

<http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/>

第15回里川文化塾 拡がる雨水利用

会期：2013年10月18日（金）10：00～15：00

会場：すみだ環境ふれあい館～墨田区内のフィールドワーク～墨田区役所庁舎

ナビゲーター：山田和伸さん 墨田区区民活動推進部環境担当 環境保全課指導調査担当

ゲスト：伊藤林さん（いとう しげる）NPO法人雨水市民の会 事務局長

ゲスト：高野祐子さん 東京私立中学高等学校地理教育研究会会員、第7期江東内部河川流域連絡会都民委員

雨水利用の先進地、東京都墨田区。その背景には、雨水を有効に利用するだけでなく、水害抑制への期待があったといえます。東の荒川、西の隅田川に挟まれたデルタ地帯にある墨田区では、大雨のたびに合流式下水道（雨水と生活雑排水を同じ管で流す方式）から汚水があふれ、地下の飲み水タンクが汚染される問題が起きていたからです。

新・国技館に1000トンの雨水タンクが設置されたのは、1979年（昭和54）に発足した自主研究グループの学びからの成果です。また、区庁舎のトイレ洗浄水の32.8%を、1000トンの雨水貯留タンクによってまかなっています（2012年〈平成24〉度実績）。まちなかには、地下タンクに雨水を集めて、手押しポンプで水を汲み上げる〈路地尊（ろじそん）〉や200リットル程度の雨水タンク〈天水尊（てんすいそん）〉や〈ミニダム〉が随所に設置されています。

普段から利用しながらゲリラ豪雨などの都市型水害を抑制し、災害時には貴重な水源にもなる「雨水利用」の実際を、フィールドワークと区職員、区民のお話から学びました。



第16回里川文化塾 木版画の魅力と和紙を知ろう

会期：2013年11月8日（金）13：00～16：30

会場：ミツカン茅場町中埜ビル3階会議室

プログラムリーダー：賀川一枝 機関誌「水の文化」編集長

ナビゲーター：デービッドブルさん（David Bull）木版画家。せせらぎスタジオ主宰

ゲスト：高田誠さん 元・岐阜県紙業試験場、前・岐阜県紙業連合会の事務局長

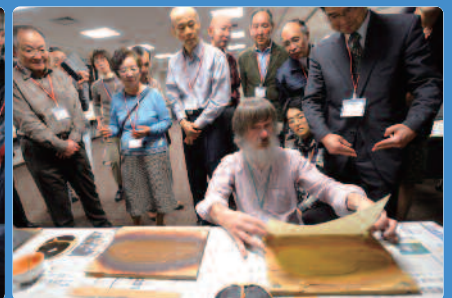
及び美濃手すき和紙協同組合事務局長

ゲスト：杉原吉直さん 和紙ソムリエ。(株)杉原商店代表取締役

日本三大和紙産地から越前と美濃のゲストをお招きして、産地の現状や歴史についてお話いただきました。

木版画家のデービッドブルさんからは、「木版画に用途（意味）を持たせれば、美しく、人の手でつくった〈生きたクラシック〉になる」と。江戸時代の木版画はアートではなく、芝居のチラシや役者のプロマイド、伊勢参りのお土産など、用途がある実用品だったからです。自身も現代的な題材と出会い、インターネットで世界中に木版画を発信しています。続けて、デービッドさんの指導の下、摺り体験を行いました。

今回の参加者は、紙の仕事をしている人や趣味で木版画をつくっている人が多く、木版画が密かに注目を集めていることがわかりました。「和紙の需要を増やして、産地の和紙職人さんや若手の摺師、彫師が育成されるよう応援したい」「和紙は水の良い所でしかつけれないからお酒もおいしく、山紫水明。旅先に迷ったら、和紙産地に行ったらいい」といった参加者の声が聞かれました。



2013年の里川文化塾はすべて終了しました。詳細はHPでお知らせしています。

■水の文化47号予告

特集「橋」(仮)

さまざまな場所に架けられた橋は、橋渡しというように何かと何かをつなぐ役割を果たしています。何をつないでいるのか、なぜつないでいるのかを探っていきます。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。今年度の企画についても、詳細は順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

編集後記

◆ 都市農業の定義からスタートした企画でした。取材が続けるうちに、そこで現実と向き合い知恵と熱意で前向きに取り組んでいる人たちに出会い、都市農業の可能性を感じるようになりました。美味しい食物をいただけることに感謝しながら、エールを送りたいと思います。(後)

◆ 都市農業は新鮮な農産物の供給、地域のコミュニティの可能性、災害時の避難場所など、様々な機能と可能性を持っている。市民農園や農家レストランなどは人気を博しているが、多くは事業の継続性からは危うい一面もある。生産・加工・流通と、小規模同士の連携・分担などを模索して、事業規模、組織体制などを拡充して生き残ってもらいたい。(新)

◆ 小さい頃は家の周りの山をよく走り回った。そこには家庭菜園より広い個人の畑がたくさんあった。そのうちの我が家の畑で収穫した野菜を食べた。今は畑との距離が遠くなってしまった。でも今もその山は開発されずそのまま残っている。どうなっているのか見に行きたくなくなった。(ゆ)

◆ 「細々と」という先入観を抱いていた「都市の農業」が、こんなにも工夫と情熱に溢れたものだとかわかった。母校の小学校では、毎年近隣農家の協力を得て、児童にサツマイモ作りをさせていたのだが、あれは今も続いているのだろうか。(原)

◆ 1つの品目で利益をあげるのではなく、ロングテールの要素を都市農業にみた。同じものならなるべく安いものを買う母親も、直売所の珍しいものにはお財布の紐もゆるむ。多種多様な小規模生産の集合体には、そんな魅力の付加価値があるのかもしれない。(力)

◆ 区民農園が人気です。リタイア世代の方が実に楽しそうに土をいじり、子供を連れたママに種のとき方を教えたり、収穫を分けてあげたりしています。地域の緩やかなコミュニティの場である事も、都市の農地の大事な役割だと思います。(麻)

◆ 農文協の甲斐良治さんから「農地の評価は時代背景によって左右されてきた」と教えられた。世の中には不易流行、変わるべきものと変わらざるべきものがある。見極めは非常に難しいが、何年経っても古びないものの方を見方を心掛けたものだ。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第 46 号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁無断転載複製

発行日 2014年(平成26)2月

企画協力 沖大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
島谷幸宏 九州大学工学研究院教授
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

客員主幹研究員 中庭光彦 多摩大学准教授

制作 後藤喜晃 新美敏之 松本裕佳 小林夕夏 原田朱野

編集製作 賀川一枝 編集長 小野田麻里 中野公力 賀川啓明 撮影・デザイン

発行 ミツカン水の文化センター
〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中壘ビル4F
株式会社ミツカングループ本社
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局
〒104-0043 東京都中央区湊3-4-10 レジディア10F
Tel. 03 (3552) 7504 Fax. 03 (3552) 7506